

平成30年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査－8号)

農林総合研究センター
平成30年7月18日調査

気象経過

< 平年対比 >

北陸地方は、7月9日ごろに梅雨明けしたとみられます。

【平均気温】

- ・ 7月第2半旬は、金沢、輪島ともにかかなり高い（平年差：金沢+1.0℃、輪島+1.0℃）
- ・ 7月第3半旬は、金沢、輪島ともにかかなり高い（平年差：金沢+2.6℃、輪島+2.9℃）

【日照時間】

- ・ 7月第2半旬は、金沢はかかなり多く、輪島は並（平年比：金沢 141%、輪島 107%）
- ・ 7月第3半旬は、金沢、輪島ともにかかなり多い（平年比：金沢 195%、輪島 198%）

【降水量】

- ・ 7月第2半旬は、金沢、輪島ともにかかなり多い（平年比：金沢 248%、輪島 311%）
- ・ 7月第3半旬は、金沢、輪島ともにかかなり少ない（平年比：金沢 6%、輪島 2%）

【1ヶ月予報】

7月12日発表の1か月予報（7月14日～8月13日）では、期間の前半は、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

生育概況等

【本田の生育】

1. 出穂期予想

6月下旬から気温が高く推移したことから、前回調査時に比べ予想出穂期は早まっている。

ゆめみづほは、加賀地域、能登地域ともに既に出穂期を迎えているほ場が多く、近年より2～3日早い。

能登ひかりは近年並～2日程度遅くなると見込まれる。

コシヒカリは、加賀地域は平年より3日程度早く、能登地域は平年より3～7日程度早いと見込まれる。

ひやくまん穀は、加賀地域で前年より2日程度早く、能登地域は前年より7日程度早いと見込まれる。

ゆめみづほ	加賀：	7月17日 頃	近年より2～3日早い
	能登：	7月19日 頃	近年より3日早い
能登ひかり	能登：	7月25日 頃	近年並～2日程度遅い
コシヒカリ	加賀：	7月24日 ～ 7月30日	平年より3日程度早い
	能登：	7月28日 ～ 8月2日	平年より3日～7日程度早い
ひやくまん穀	加賀：	8月3日 ～ 8月7日	前年より2日程度早い
	能登：	8月6日 ～ 8月8日	前年より7日程度早い

2. 草丈

ゆめみづほは近年比106%（加賀地域106%、能登地域105%）とやや長い。

コシヒカリは平年比102%（加賀地域101%、能登地域104%）と並。

ひやくまん穀は前年比106%（加賀地域103%、能登地域109%）とやや長い。

3. m²当たり茎数

ゆめみづほは近年比103%（加賀地域103%、能登地域102%）と並。

コシヒカリは平年比98%（加賀地域97%、能登地域100%）と並。

ひやくまん穀は前年比100%（加賀地域102%、能登地域99%）と並。

㎡当たり莖数（平年、前年）及び株当たり莖数

コシヒカリ	県平均	415本	（平年比 98%	前年比 92%	）	22.8	本/株
	加賀	402本	（平年比 97%	前年比 91%	）	22.2	本/株
	能登	435本	（平年比 100%	前年比 95%	）	23.6	本/株
ゆめみづほ	県平均	505本	（平年比 103%	前年比 95%	）	27.3	本/株
	加賀	506本	（平年比 103%	前年比 95%	）	28.2	本/株
	能登	502本	（平年比 102%	前年比 95%	）	25.5	本/株
ひやくまん穀	県平均	412本	（平年比 —	前年比 100%	）	23.3	本/株
	加賀	399本	（平年比 —	前年比 102%	）	23.7	本/株
	能登	424本	（平年比 —	前年比 99%	）	22.9	本/株

4. 葉色

コシヒカリは前回調査時と変わらず、4.2（葉色板値）と平年及び前年並となっている。
ひやくまん穀は、前回調査時から低下しており、4.3（葉色板値）と前年並となっている。

【病害虫の発生状況】

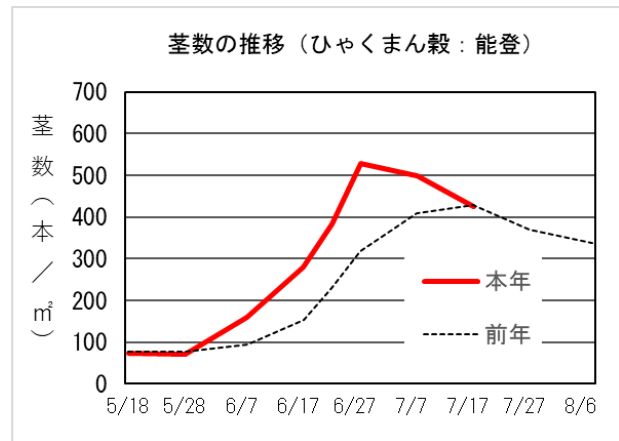
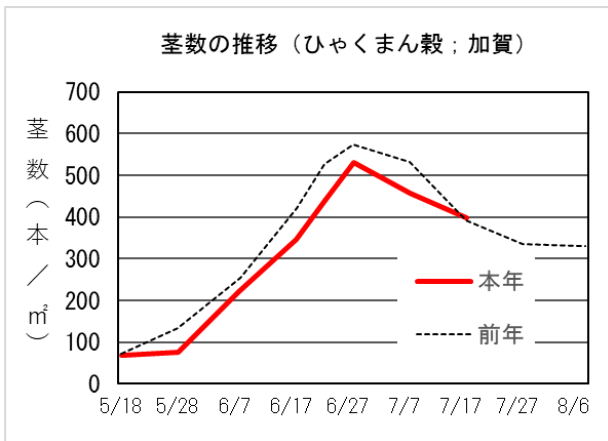
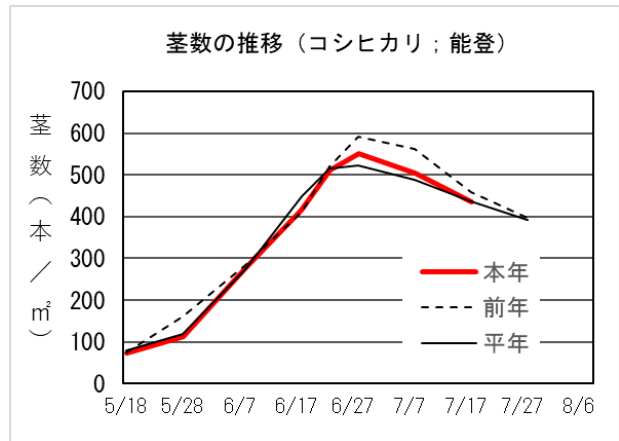
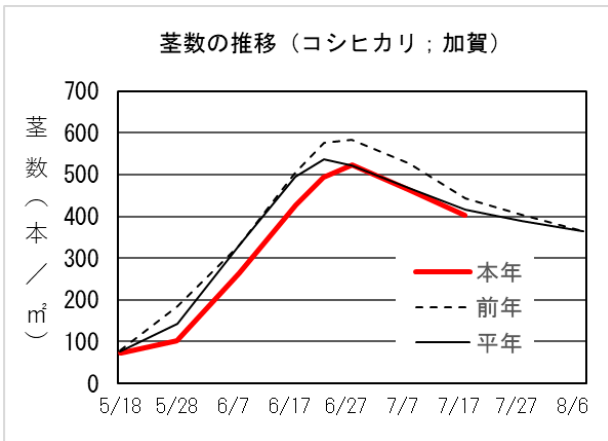
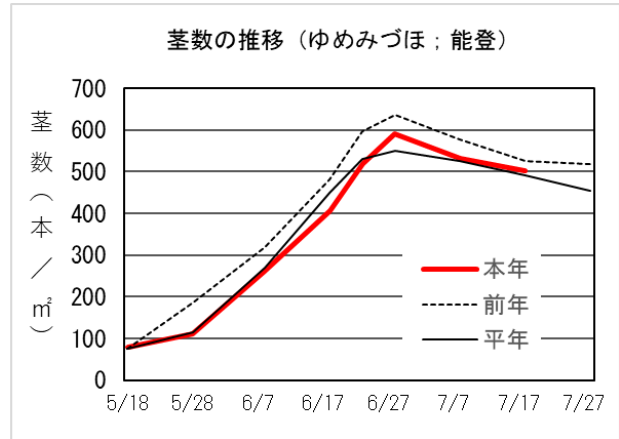
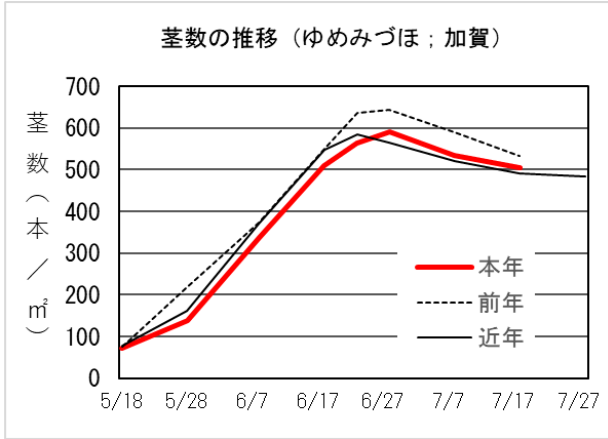
1. 雑草地におけるカメムシ類の発生は過去20年の平均値に比べ多く、特に飛翔性カメムシ類が多い。[病害虫発生予察注意報第1号（平成30年7月12日付）参照]
2. 葉いもち及び紋枯病の発生が僅かに見られる。
3. ニカメイチュウの被害が僅かに見られる。

当面の対策

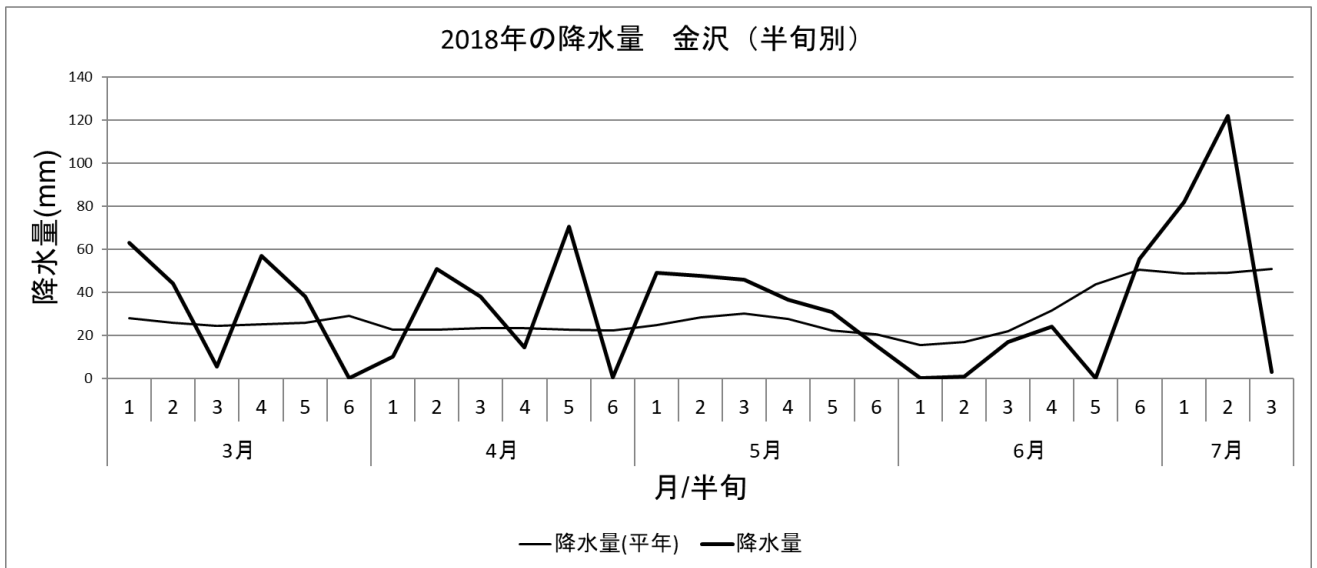
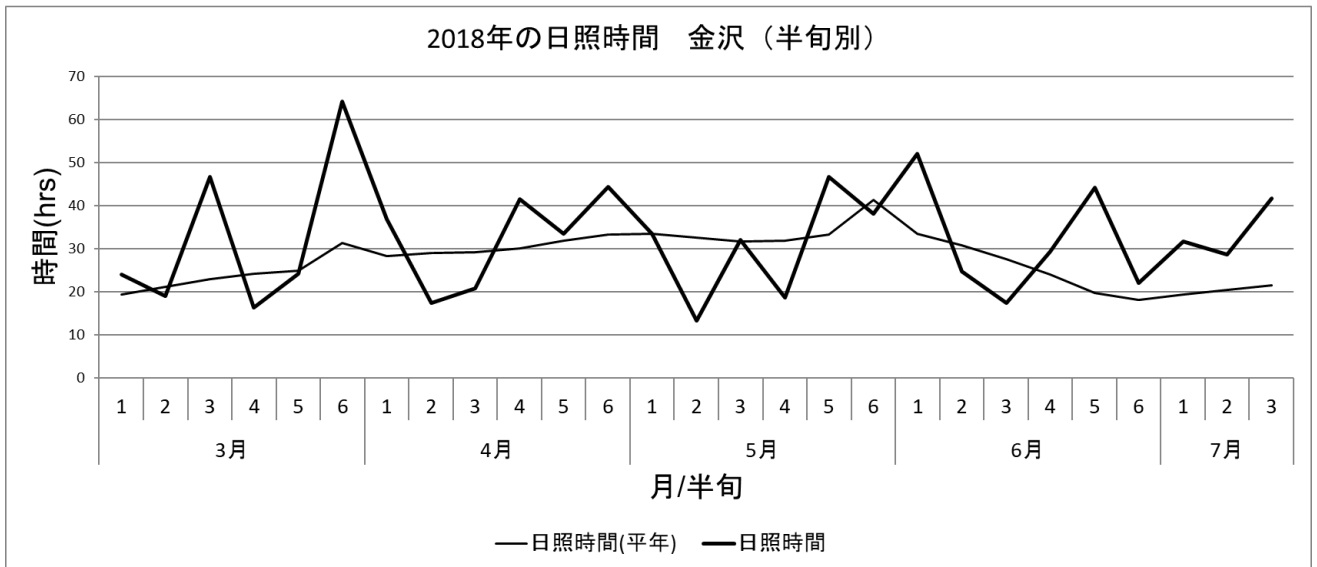
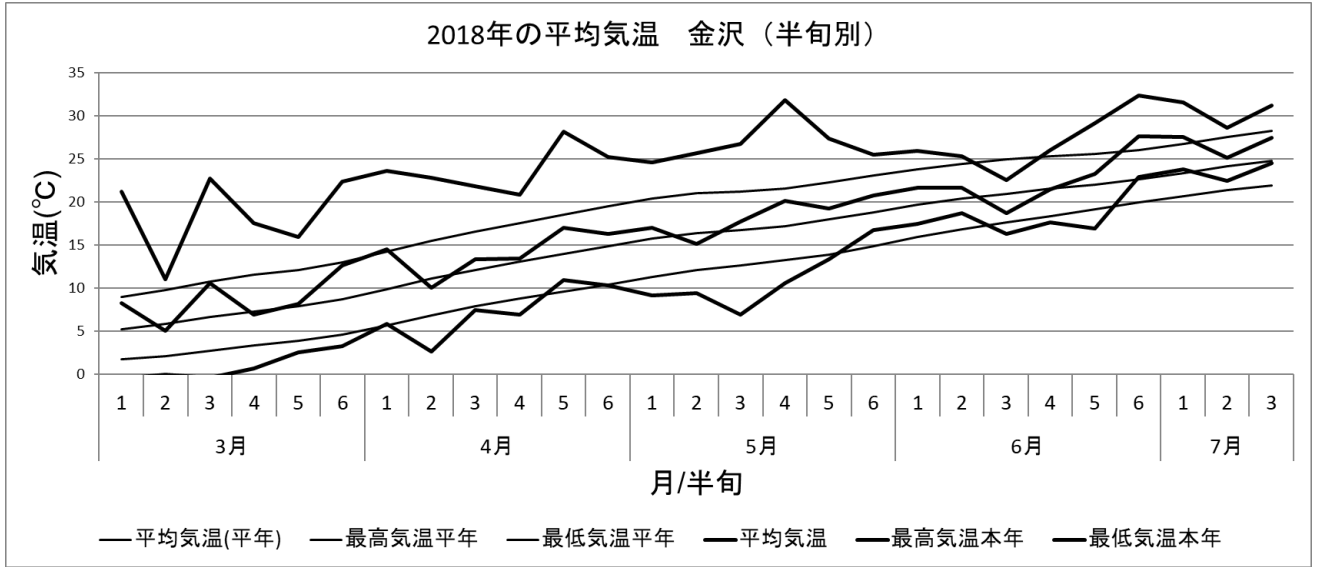
1. 早生は出穂期を迎えており、中生、晩生はこれから出穂期を迎えることから、（3～4日おきに通水）による**飽水管理を徹底する。**
2. 分施体系のコシヒカリ及び、ひやくまん穀の2回目の穂肥は、高温条件下での稲体活力維持のため、地域の基準量を目安に適切に施用する。今後、出穂期が予想より早まる可能性があるため、適期を逸しないように稲体をよく観察し、遅くとも葉耳間長+2～3cm（出穂7日前）までに終了する。
3. 出穂期が早まっており、防除が遅れないように留意する。斑点米の発生を防止するため、7月中に出穂期を迎えるほ場は、出穂7～10日後と14～17日後の2回の本田防除を徹底する。また、8月以降に出穂期を迎えるほ場では、出穂7～10日後の本田防除を徹底する。
なお、防除後もカメムシの本田侵入が確認された場合は、さらに追加防除を実施する。
4. 出穂後の畦畔除草はカメムシ類の本田侵入を助長するので、やむを得ず除草をする場合は本田防除の直前に行なう。
5. 出穂後は登熟向上を図るため、間断通水（3～4日おきに通水）による**飽水管理を刈り取り3日前まで**行う。特に、登熟初中期（出穂後6～20日頃）に**高温と水分不足が重なると、白未熟粒・胴割粒の発生を助長**するので通水を徹底する。
6. 強風やフェーンが予想される場合はあらかじめ入水し、稲体の活力低下を防止する。
7. また、6月第6半旬～7月第1半旬の土壤窒素無機化量が多かったことから**コシヒカリの下位節間が伸長**しており、**早期に下葉が枯れ上がると株支持力が低下し倒伏を助長**するため、**飽水管理を徹底**する。
8. 用水をため池に依存している地域等では、計画的な用水利用に努める。
9. 穂いもちの発生を防止するため、葉いもち発生の有無に関わらず出穂前の基幹防除を徹底する。なお、葉いもちの発生を認めたら直ちに周辺ほ場を含めて防除を実施する。
10. 今後も高温が続くことが予想されており、出穂期は今回の予想より早まることが懸念されることから、出穂期に応じて防除計画や共乾施設の稼働計画等の再確認を行うこと。

<参考：地域別茎数の推移>

・ゆめみづほの現在の茎数は、近年並で前年よりやや少ない。コシヒカリは平年並で前年よりやや少ない。ひやくまん穀は前年並となっている。ゆめみづほの穂数は前年よりやや少ないが近年並を確保、コシヒカリは平年および前年並、ひやくまん穀は前年並に確保される見込である。



気象経過イメージ（金沢気象台）



気象経過イメージ（金沢気象台）

